

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号: 12606

研究種目: 研究活動スタート支援

研究期間: 2010～2011

課題番号: 22820023

研究課題名(和文) 日本の近代・洋風彫刻の受容についての考察—工部美術学校彫刻学科卒業生の足跡から

研究課題名(英文) The Study about the Acceptance of Western-Style Sculpture in Modern Japan — From the footprints of graduates of Department of Sculpture of The Technical Art School (Kōbū Bijutsu Gakkō).

研究代表者

吉田 朝子(YOSHIDA ASAKO)

東京芸術大学・大学美術館

研究者番号: 50589497

研究成果の概要(和文):

工部美術学校彫刻学科は西洋の彫刻を学習する機関であるとともに、作品を作るために必要な原料を発見し、実用化するという役割を担っていた。こうした教育は生徒の卒業後の進路に活かされ、卒業生のなかから陶土・釉薬・油土の改良や開発に携わる者、また石膏を使用した模型製作・販売に携わった者などが輩出された。またヴィンチェンツォ・ラグーザの教えを受けた者のなかから次世代の作家を指導する者があらわれ、彼の影響を日本の近代彫刻史のなかに刻んだ。

研究成果の概要(英文):

The work of the Department of Sculpture of The Technical Art School (Kōbū Bijutsu Gakkō) was to educate students western sculpture. Also, it was responsible for discovering materials of sculptures and for making them practical uses.

Such education was effective for the life of students after their graduation. Some of them were engaged in improvement of clay, glaze and oil clay, and also were engaged in the manufacturing plaster models and saling them. Moreover, there were some graduates who had educated next-generation writers and had succeeded the influence of Ragusa・Vincenzo in the history of modern sculpture of Japan.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	1, 000, 000	300, 000	1, 300, 000
2011 年度	1, 000, 000	300, 000	1, 300, 000
年度			
年度			
年度			
総 計	2, 000, 000	600, 000	2, 600, 000

研究分野: 美術史

科研費の分科・細目: 研究活動スタート支援

キーワード: 日本近代、美術史、彫刻、工部美術学校、ヴィンチェンツォ・ラグーザ、洋風彫刻、塑造、美術教育

1. 研究開始当初の背景

工部美術学校は日本で最初に設置された官立の美術学校である。明治9(1876)年11月に開校してから明治16年1月に閉校する6年2ヶ月の間に彫刻学科生徒46名が在籍、彫刻教師としてヴィンチェンツォ・ラゲーザ(1841-1927)がイタリアから招聘された。この彫刻学科の生徒は洋風彫刻の担い手の第一世代として生きたが、その活動についてはほとんど顧みられることがなかった。

工部美術学校については、戦前から隈元謙次郎らにより研究が着手され、昭和50年代後半から昭和60年代にかけては青木茂・井関正昭・尾崎尚文に代表される明治美術研究学会(現・明治美術学会)の集中的な調査が行われた。またその業績を踏まえて、90年代初めに金子一夫・田中修二による優れた研究論文が続けて発表された。また近年にはイタリア側の資料を活用した河上眞理の論文がある。しかし、これまでの工部美術学校に関する研究にはやや偏りがあった。それというのは、学科が画学科と彫刻学科の二科で構成されていたにもかかわらず、彫刻関係の論及が極端に少なく、さらに、その少ない論及のほとんどが明治9年にラゲーザが来日してから、彫刻学科第1期入学の大熊氏廣(1856-1934)が東京市内に西洋式の大規模モニュメント《大村益次郎像》(千代田区・靖国神社)を竣工させた明治26年までの約17年間のことに集中していることである。そのために、その後の工部美術学校出身彫刻家の活躍については、東京美術学校彫刻科と高村光雲、それに続く文部省展覧会という流れのなかで、ごくわずかに《有栖川熾仁親王像》(大熊作、明治36年竣工)、東宮御所(迎賓館赤坂離宮、明治39年大略完成)の建築装飾、《井伊直弼像》(藤田文蔵(1861-1934)作、明治42年)などの作品が紹介されているに過ぎず、そのために一般的な近代日本彫刻史の概説に従えば、工部美術学校で彫刻を学んだ人々は、明治10年代の洋風彫刻の写実的な技法及び価値観を維持して、「銅像」や建築装飾を作り続けたといった印象を受けざるを得ない状態にあった。

工部美術学校の卒業生らの代表作とされるものには、モニュメントとしての性格を強くもった作品が多いのは確かであるが、工部美術学校出身者の調査を進めていけば、それらの括りに当てはまらない作品に出会うことがしばしばである。そして、彼らは彼らなりの芸術的な理念を持ち、これらを制作していた様子がうかがえるのである。工部美術学校出身の彫刻家の作品・資料を精査し、生徒たちの卒業・修業後の行動と展開をあとづけ

ることこそ日本近代彫刻史の実像を構築するうえで不可欠であると考えたことから、2010年度の科学研究費助成金に応募した。

2. 研究の目的

彼らの活動を明確にすることにより、高村光雲(1852-1934)らによる伝統的木彫の発展と荻原守衛(1879-1910)らによるロダニズムに続く流れでのみで語られている日本近代彫刻史の再検討をおこない、日本近代彫刻史にそのどちらにも属さない第3の流れが存在することを示すことを目的とする。

3. 研究の方法

御遺族への聞き取り調査と散逸・消滅の危機にある卒業生関係の作品・資料の基礎調査を行った。

工部美術学校は継続機関を得ることなく廃校にいたってしまったために、当時の資料は東京大学工学部と東京国立博物館と国立公文書館がわずかに所有しているに過ぎない。現在最も有効な手段は、御遺族からの聞き取りによって彼らの足跡をできうるかぎり再現することであった。御遺族から得られた情報を基に作品・資料調査を行った。

「いまこの研究をやらなければならなかった」理由に卒業生のご遺族の高齢化の問題がある。卒業生らを直接知る世代が現在90歳代から70歳代に達しており、情報は散逸・消滅する瀬戸際といえる。研究者には御遺族が所有する情報が消滅する以前に、整理・精査をすることがもっとも求められていた。今後、工部美術学校の生徒について研究をする場合は文献に頼らざるを得なくなると思われるが、彼らのメディアへの露出は限られていたためこうした方法は効率が見込めない。

その方法として、工部美術学校の彫刻学科の卒業生のうち卒業後の経歴がある程度判明している6作家を主な調査の対象とした。この度の調査で、調査対象となる作家は堀通名、藤田文蔵、寺内信一、菊地鑄太郎、大熊氏廣、佐野昭の6人であった。本研究は平成22年以前から申請者が継続をしているものであり、すでに御遺族への調査が終了した作家、これから調査をお願いする作家と進行状況に開きがあった。申請者は進行が初段階の作家3人を(I群)として、調査がある程度進んでいる作家1人を(II群)、すでに論考にまとめている作家2人を(III群)に分けて段階的に調査を進めた。

4. 研究成果

1. 工部美術学校彫刻学科

1876(明治 9)年に開校した工部美術学校(以下、美術学校)は、日本で初めて設立した官立の美術学校である。はじめ画学科と彫刻学科の2科で構成され、開校から1年後に入学者の基礎修養を目的にした予科が加わり3科となった。入学者の年齢は15歳から30歳までと定められ、美術学校に入学した生徒たちはおよそ一年間を予科で学んでから、専科に分かれて合計6年間を学んだ。1882年に20名の生徒が卒業し、途中退学者を含めれば47名の生徒が在籍をしたとされる。

ヴィンチェンツォ・ラグーザ(Ragusa, Vincenzo, 1841-1876)が美術学校に赴任したときの所感をマリオ・オリヴェーリ(1901年頃-1965年頃)は『大理石の彫刻家』のなかで幾何学の初歩や装飾文字を教えねばならないし、装飾用の塑造術や彫像も教授せねばならず、なかなか多忙また辛苦が多かった」と書き残している。1856(安政3)年に蕃書調所が設置され、西洋の科学的な遠近法や明暗法が用いられ、日本の洋画の研究は明治になる以前かなり進んでいたという事実に対して「彫刻」という言葉が初めて公的な文書で用いられたのは1876年に作成された美術学校の諸規則においてである。美術学校彫刻学科の入学者には、入学試験直前まで「彫刻」とは何かを知らずに窓から教室を覗き込み裸体の石膏像が幾つか並んでいるのを見て「意外と面白いかもしれない」と思い受験を決めた者すらいたという状況であった。

2. 工部美術学校の素材研究

そのため、ラグーザは入学した生徒たちに、鉛筆やコンテ・クレヨンでもって人物や動物をデッサンすること学ばせ、そして立体の手本から直接立体で模倣すること、さらに油土で制作した作品を石膏に型取りをすること、また大理石に転写をすることを教授した。しかし、当時いかにその技法や手本が伝わったとしても、それに伴う物質的な供給、たとえば油絵具、筆、キャンバスなどの材料は輸入を待たねばならず、工部美術学校のみならず国内で画材全般は決定的に不足していた。1877(明治10)年5月1日、工部省は仮皇居謁見所築造のために茨城県の阿武隈系南端一帯に産出する石灰石(寒水石)の調査を行うため、ラグーザを現地調査に加わらせていることは有名な話であるが、それだけに留まらず、ラグーザが活用のために協力をした素材には石膏をも含まれることが調査の経過から浮かび上がってきた。

1876年の美術学校開校当時においては、国内産の石膏は未だに使用されるに到っていなかった。1876、77年より以前に工部省は日本の各地に石膏の産出地があることを認識

していたが、運輸が不便で最終的に単価が増してしまうことから清国産の石膏の輸入を仰いでいた。そのような時勢において、1876年秋に内務省勸業寮の命を受けた武田昌次が、甲斐国雨畑村(現在の山梨県南巨摩郡早川町)の硯細工師から石膏の塊を得たことで同地から産出が確認され、そして1877年の内国勸業博覧会で宮城県より陸前国加美郡宮崎村産(現在の宮城県加美郡宮崎町)の石膏石が出品されたことから、日本国内にも鉱床が存在することが把握されるようになった。宮城県産の石膏が1878年6月頃から同省工作局の注文で取り寄せられることになるのである。宮城県産の石膏石の試験は美術学校でラグーザの監督下で行われた。したがって1878年6月以降に作られた生徒作品や《日本婦人》(重要文化財)を含むラグーザの作品には、美術学校内で試験され使用するに到った宮崎村産の石膏が使われていると推測される。

金銭的な出費をすれば誰でも材料が手に入えられる現在と異なり、まず材料を「開発」することから始めなければならなかった明治という時代において、工部省そして美術学校は西洋の彫刻と絵画を学習する機関であるとともに、作品を作るために必要な原料を発見し、実用化するという役割を担っていたと思われる。それまで石膏という素材は需要としては高まりを見せていたもののまだ一般的ではなかった。製陶業で栄えていた常滑ですら1883年の時点で石膏を用いた成型法が知られていなかった。そうした段階にあって、勸業促進を目的に開催される勸業博覧会に様々な過程を経て作り出された石膏や、大理石の作品が展示されることは、生徒の学業の成果を展示するのみならず工部省で使用可能となった寒水石や石膏といった素材を展示する目的も担っていたと思われる。

3. ラグーザの影響

3-1. 進路

材料を作る段階から制作を始めることは明治初期という時代の必然であったにしろ、生徒の卒業後の進路に活かされていた。1878(明治11)年入学の寺内信一(1863-1945)は、卒業後、常滑・瀬戸・有田などで教職に就きながら陶土、釉薬の研究と開発を重ね、各素材の特性、自身が研究開発した釉薬の生成法、さらに大理石の成分の分析等を小論文にまとめて雑誌に多数寄稿している。また、1877年入学の堀通名(1854-1943)は、1900年に国内で初めての油土の開発に成功をした人物でもあることがわかった。1877年頃入学の菊地鑄太郎(1859-1945)は工部美術学校を卒業したのちに石膏模型製作所を経営して美術教材で使われるデッサン用の石膏像を販売、東京美術学校の石膏像納入記録にも

彼の名前を見ることができた。彫刻学科に最年少で入学した佐野昭（1865-1955）は石膏模型を作る技術を請われて宮内省内匠寮に入省し東宮御所の建設に携わった。また教育の世界に進んだ人間も少なからぬ数で、明治美術会が開いた教場で大熊氏廣（1856-1934）や菊地鑄太郎は教鞭を握っており、また内藤陽三（1860-1889）、寺内信一は常滑美術研究所（現・常滑高等学校）に赴任、藤田文蔵（1861-1934）は女子美術学校（現・女子美術大学）を創設した。

3-1. 作品

美術学校は彫刻を「石膏を以て動物不動物を模写する術」と定義し、滞日中にラグーザが制作した作品が《日本婦人》のように着物の中まで人体が作りまれた写実に徹した作品であったように、ラグーザの指導とはまず対象を正確に写すことを旨とするものであった。生徒らが生涯ラグーザの影響を失わなかったことは、1923（大正12）年に作られた佐野昭の《獅子》や、藤田文蔵が1933（昭和8）年に制作した《狩野芳崖像》が確固とした写実に基づいた表現であることから見てとれる。しかし、生徒たちにとってラグーザ帰国後の人生は、ラグーザに教えを受けた数年間に対してとても長いものであったことが調査の結果推測された。

1876年に入学、首席で卒業した大熊氏廣は卒業後、イタリアとフランスに留学をしたが、彼は留学中の師であったジュリオ・モンテヴェルデ（1837-1917）に生涯感謝をしていたという話が伝わっている。そして、佐野昭も1894年頃には宮内省内匠頭の片山東熊（1854-1917）から改めて建築を学び、また菊地鑄太郎も黒田浦輝（1866-1924）や久米桂一郎（1866-1934）らと交流をもつことにより、後年には彩色豊かな風景雨を残していた。1886年に内藤陽三はベックマンの貸与留学生となり、オットー・レッシングという建築彫刻家に弟子入りをした。彼は惜しくも帰国を果たせずに客死をしたが、オットー・レッシングが内藤陽三に経歴を訊ねたとき、内藤陽三は「平生彫刻が大好きで色々な物を作って楽しみたい」と答えて、ラグーザに就いて6年間修業した事は「今後却って見劣りせんことを慮りて、語らざりしとなり」となったという。これは生徒たちの卒業後のラグーザに対する意識の変遷を考えるうえで興味深い。

大熊氏廣の遺品には5冊の写真帳が残されており、彼が留学先から持ち帰ったルネサンス期や18世紀西欧の彫刻、ローマの古建築を写した630枚の写真が残されている。そのなかにわずかにラグーザの作品の写真が5枚収められていることに象徴されるように、彼らにとってのラグーザとは、彼らが「彫刻」を始めるときの端緒であり重要な役割を果たした存在であったことは言うに及ばないが、

その後の彼らの長い人生のなかにあつて、ラグーザとはモザイクを構成する1つのピースのようになっていった。

4. まとめ

明治美術会が開いた教場で大熊氏廣や菊地鑄太郎が指導した生徒、そして常滑美術研究所で寺内信一そして内藤陽三が教授した生徒たち、藤田文蔵が指導した学生はもちろん存在する。生徒たちはラグーザから彫刻を学び、そのうえで教授を行っているのであるから、次世代に何らかの影響があったことに疑う余地はない。しかし、オーギュスト・ロダン（1840-1917）をはじめとする西欧からの影響を絶え間なく受け続けていた近代日本彫刻史のなかにあつて、ラグーザ、そして生徒たちの次世代へ影響はひどく掴み難い。例えば、ラグーザの内弟子であった小倉惣次郎（1845-1913）から彫刻の指導を受けた月谷初子（1869年頃-1945）という女流彫刻家に師事していた、木彫家後藤白童（1908-1998）の作品にはラグーザの影はまったく無いと言える。しかしまた一方で、藤田文蔵から塑造を習ったという彫金家の清水南山（1875-1948）は“2次元から3次元の造型の必要性を説いたその背景には、藤田文蔵の影響があった”と話していたと伝承されている。そして、清水南山は大甥であった平山郁夫（1930-2009）に、夏休みや戦時期の疎開期間などを通じて、粘土で彫刻を教えている。また菊地鑄太郎から石膏の技術を学んだ横田常吉（?-1940）の息子の横田文男（在職期間1946-1975）は、戦後に大阪堺市にある大阪府立三国丘高校で美術教師として教鞭を握ったが、彼が在職中に指導した生徒のなかに彫刻家の藪内佐斗同氏（1953-）がいる。ラグーザの影響というものは細かい視覚にとらえられない程の断片となつて、日本の近代以降の彫刻史のなかに沈み込んでいるといえるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

吉田朝子「工部美術学校彫刻学科の教育」

明治美術学会、2010年11月6日、東京芸術大学

〔図書〕（計3件）

吉田朝子「迎賓館赤坂離宮」ほか『近代日本彫刻集成 明治後期・大正編』国書刊行会、2012年1月31日、pp.24-25, pp.70-71, pp.108-109, p.115

国内外の別：国内

吉田朝子「工部美術学校彫刻学科の教育」『明治の彫塑 ラグーザと荻原守衛』2010年10月、東京芸術大学大学美術館、pp. 61-66

内外の別：国内

吉田朝子「工部美術学校と洋風彫刻」『近代日本彫刻集成 幕末・明治編』国書刊行会、2010年9月16日、pp. 113-123, pp. 125-127, pp. 129-136

国内外の別：国内

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 朝子 (YOSHIDA ASAKO)

東京芸術大学・大学美術館・学芸研究員

研究者番号：50589497